

自由テーマ：Think globally, act locally
ミネラルウォーターの真相

<Abstract>

水道水は美味しくない、格好悪い、危ないといった理由でミネラルウォーター以外を口にしないという人は、少なくないようだ。年々増え続けるペットボトル水の消費量、その原因、それによって起こる問題、安全性をアジア太平洋資料センター(PARC)制作のDVD「ペットボトルの水」のデータをもとに検証し、問題点の対策を提案する。さらに、ボトルウォーターの安全性、環境や人間への負荷を検証しながら、一消費者としてできることを模索する。

<ボトルウォーターの増加>

ペットボトル飲料の普及は、誰もが日常の中で実感しているだろう。日本では1996年4月の小容量ペットボトル生産の解禁以来、炭酸飲料、お茶、ジュース、コーヒー、スポーツドリンクなど様々な飲み物がペットボトルに詰められ販売されるようになった。その中でも消費量が多いのはミネラルウォーターである。ペットボトル入り水の消費量は世界中で年々増加している。2005年の世界全体での消費量は1628億リットルにもなった。1997年から2005年の8年間で日本の売上・消費共に2倍になり、2007年上半期(1-6月)の出荷量は過去最高を記録した。ボトルウォーターの消費は先進国に留まらず、米国で成功した企業がアジアでの水市場に進出している。タイでは人口一人当たり年間73リットル、日本では14リットル、中国では11リットルのボトルウォーターを消費している。

<ボトルウォーターの増加>

1993年米国ウィスコンシン州ミルウォーキーで、湖を水源とする水道水がクリプトスポリジウムにより汚染される事件が起き、死者を出した。また日本では1980年代から貯水タンクの汚れによる水道水汚染の懸念と水道水のおいさを嫌う傾向があったため、生活用水をミネラルウォーターに頼る家庭が増加した。いずれの場合も、水道水への不信感が消費量増加の要因となっている。

容器包装リサイクル法制定の翌年、小容量ペットボトルの生産が解禁となり、500mlボトルが多く出回るようになった。広告は健康的、美容に良いと謳い、米国ではお洒落で健康的、日本では健康的且つ癒し・リラックスなどの付加価値がついた。更に、酸素添加や電気分解などの付加価値も加わった。PARCによれば、「広告は水を特別な飲み物に変えた」のである。

<ボトルウォーター大量消費の問題点>

ボトルの容量が少量になればなるほど、廃棄されるペットボトルは増加する。1990年代後半のプラスチック廃棄物の約62%がペットボトルであった。ごみの減量化に反するという市民の声に企業や政府は応じることもなく、容器包装リサイクル法に解決を頼った。ボトルメーカーの反応は回収問題を検討するなどの曖昧な表現に留まった。容器包装リサイクル法はリサイクル費用をメーカーに一部負担を義務づけるが、残りは自治体が、つまり税金によって賄う。従ってペットボトル利用の有無に関わらずリサイクル費用を国民全体で負担する仕組みになっている。2004年のペットボトルの回収率は62%だったが、生産量が回収量を上回っているため、ごみの絶対量は増加している。

水道水が1リットル約0.14円なのに対して、ボトルウォーターは1800倍の500ml約130円で販売されている。更に、ボトルウォーターの価格に含まれるのは主に人件費、輸送費、容器代、メーカー利益で、水自体は0円である。広告の影響によって水は牛乳より高価な特別な飲み物になり、重要な商品となった。しかし地球に存在する淡水の量は変わらない。循環する淡水は公共財であり、全ての生命は水なしでは生きられない。そのような自然界の水を経済財にしていることがボトルウォーター大量消費の問題点であると言える。

<ボトルウォーターの安全性>

最後に、ボトルウォーターは本当に安全なのだろうか？ミネラルウォーターの検査基準が18項目であるのに対して、水道水は月一回の50項目の検査義務に加え、水道局独自の27項目を追加した遙かに厳しい基準となっている。つまり、ボトルウォーターが安全であるという根拠はどこにもない。

<対策>

ボトルウォーターについては、曖昧な部分が多い。広告から得るお洒落で健康的なイメージに水道水への不安も手伝って、消費者はボトルウォーターが安全な飲み水であることを疑わない。しかし成分や採水地が記載されていない商品も特に発展途上国では多く出回っている。水道水と比較して本当に安全と言えるのか？また、企業の地下水汲み上げは自由に行われている。水は全ての生命が自由に使用できるべきであり、究極の公共財である。ところが一部の人間が地下水を大量に汲み上げることで井戸の枯渇、水質汚染など、周辺地域の住民のみならず森林や生態系にまでも影響を与える。2002年、コカコーラ社がインドで大量の地下水を汲み上げたことにより地下水が下がり、地表近くの地下水でさえも汚染された事件があった。このような事件があったにも関わらず未だに地下水汲み上げ量は企業に任されている。主に先進国で使い捨て容器の水が大量に消費される一方、日々の生活に必要な水さえも奪われた人々がいる。地下水の汲み上げ量に関して何らかの規制が必要だと思われる。ボトルウォー

ターが抱える矛盾、曖昧さを明らかにし、水は地球上に不平等に存在するという前提で、全ての人間、生物が水を上手く共有できるような規制、仕組みが必要である。絶対消費量の削減を目標としながら、リサイクルに関しては、自治体の税金ではなく、メーカーとペットボトルの消費者のみが負担する、受益者負担の仕組みをつくるのが理想的である。

<一消費者として>

様々なデータを通して、私達が毎日目にするボトルウォーターが世界全体に影響を及ぼしていることがわかる。しかし実際にボトルウォーターを買う時、果たしてその水が辿ってきた経路が見えるだろうか。一本のペットボトルの犠牲となった人間や自然の姿が見えるだろうか。当たり前のように並ぶ大量の水を前に私達は水がどこから、どのようにしてたどり着いたのか、考えることすらないだろう。しかし、ボトルウォーターによって起こる問題は、企業の責任だけではない。消費者の需要があるからこそ成り立つ産業であるから、一本一本の消費が産業を拡大し、井戸水の枯渇、ごみの増加などの問題を引き起こす。それをふまえた上で、私達は、水道水を選ぶことができる。都心の水道水は消毒用の塩素を含むため、臭いが嫌われる。しかし簡単な方法で美味しく飲むことができる。健康関連のホームページによると、煮沸させて塩素を飛ばす、レモン汁を入れる、備長炭を入れることで塩素の臭いを消すことができる。また浄水器の設置や家庭用の濾過装置を利用することで、より経済的に安全な水を手に入れる。ボトルウォーターを買うとき、私達は水を購入している様で、実際には莫大なエネルギーを購入しているのだ。水道水への漠然とした不信感とミネラルウォーターの安全性をもう一度考え直し、どちらがよいか選択をすることが、今私達ができる第一歩である。

<まとめ>

ボトルウォーターは買える人にだけ得られる安全な水としての矛盾を抱える。しかし本当に安全と言えるだろうか？消費者はそう問うことなくボトルウォーターを選び、結果的に水道水への関心が薄れる。そして例え安全だったとしても、ボトルウォーターを買うことができない人には得られない安全となってしまふ。水は皆のものであり、同時に誰のものでもない。その考えを改めることが、今求められている。

参考文献：

- ・DVD「ペットボトルの水」アジア太平洋資料センター(PARC) 井上礼子 2007
- ・「昔よりおいしい！水道水」 YOMIURI ONLINE 2006/8/23
<http://www.yomiuri.co.jp/komachi/news/mixnews/20060823ok01.htm>

資料：

- 「水市場拡大、「美容に効果」で人気」 YOMIURI ONLINE 2007/ 2/25
<http://www.yomiuri.co.jp/gourmet/news/20070225gr01.htm>
- 「水道水も、おいしく飲もう！」 Health クリック
<http://www2.health.ne.jp/library/3000/w3000486.html>
- 「ミネラルウォーター出荷量 過去最高を記録」産経新聞 ENAK 2007/08/16
http://www.sankei.co.jp/enak/2007/aug/kiji/16life_water.html